

鑑賞の授業のための名曲&名盤〈クラシック〉

国土潤一

ベートーヴェン作曲 『交響曲第5番八短調 op.67』

ベートーヴェンの9曲の交響曲の中でも最も親しまれている第5番は、1808年12月22日、ウィーンのアタナー・アン・デア・ウィーンで、作曲者自身の指揮で初演された。「運命」という呼び名は、弟子のシントラーが伝えるベートーヴェン自身の言葉「運命はこのような戸を叩く」に由来するが、このエピソードの信憑性を昨今は疑問視する説もある。♩ ♪ ♪ ♪ ♪ という俗に「運命の動機」と呼ばれるテーマは各楽章に姿を変えて出現し、全4楽章を有機的に統一していく。(第2楽章では♩ ♪ ♪ ♪ ♪、第3楽章では♩ ♪ ♪ ♪ ♪、第4楽章では♩ ♪ ♪ ♪ ♪という具合で登場するテーマに注目!)。冒頭が♩ ♪ ♪ ♪ ♪ という記譜のため、ここの部分の演奏比較は容易であり、事実、トスカニーニ①や、フルトヴェングラー②、ワルター③といった20世紀前半の大指揮者による歴史的な名演奏の録音がそれにしばしば用いられた。事実、これらの歴史的な名盤は、ベートーヴェンの音楽の精神の最も伝統的かつ普遍的な部分を強く感得させるものであった。しかし、冒頭の様相の単純な比較ではなく、先述したテーマの変容を核とした、全曲の発展性と、それによって生み出される精神の高揚の差を、鑑賞では期待したい。全曲は約35分であるが、冒頭部分の比較だけでなく、全曲の比較は、授業時間を何時間か使っても行なう価値があるだろう。楽曲解釈の差異は、芸術における「自由」を教えてくれるのだから。

- ① トスカニーニ/NBC (1952年) 【BMG ファンハウス R-BVCC38020】
- ② フルトヴェングラー/BPO (1947年) 【ユニバーサルミュージック G-POCG3788】
フルトヴェングラー/VPO (1954年) 【東芝EMI TOCE3722】
- ③ ワルター/コロンビアSO (1958年) 【ソニー・ミュージックエンタテインメント SC-SRCR2690】

ジュリーニ指揮/ロスアンジェルス・フィルハーモニー管弦楽団

【ユニバーサルミュージック G-UCCG8003】

ロスアンジェルス・フィル時代のジュリーニの充実、この全く無駄のないベートーヴェンの傑作交響曲を、構築面からも情緒面からも十全に音化している。オーケストラの技術の研磨と音楽への転換は、先述したトスカニーニら先達の大指揮者の精神を継承しつつ、オーケストラの機能美をも加味したものとなっている。ソナタ形式の巨人であったベートーヴェンの造形性の偉大さを感じさせてくれる万全の演奏であると同時に、その造型性が人間の精神の営みでもあるということを実証してくれる演奏ともなっている。いぶし銀の名演と言えよう。

カルロス・クライバー指揮/ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

【ユニバーサルミュージック G-UCCG9508】

カルロス・クライバーの若き日の雄姿が音として取められているこの1974年の録音は、この曲のもつ強い音楽的推進力と高揚感、躍動感の表出において傑出した演奏である。爽快な音楽運びは、クライバー独自のアーティキュレーションとフレージングのセンスを背景としているが、即興的とも評し得るような音楽的生命力は、聴き手の耳を強くとらえて離さないだろう。ステレオ以降の同曲の録音で最も人気が高いのがこのクライバー盤であるのも、至極当然と納得できる演奏内容である。アナログ録音だが、鑑賞においても音質のクオリティに不足はない。

ヴァント指揮/北ドイツ放送交響楽団

【新星堂 RCA-SRC1003】

ドイツの名匠ヴァントが北ドイツ放送響のシェフを務めていた時代の素晴らしい録音。ドイツにおける「ベートーヴェン演奏・解釈の伝統」の上に、現代オーケストラの機能美を加えたこの演奏は、楽曲に対する誠実さと敬愛に溢れている。外面的な効果を狙うことなく、少しのけれん味ももたず、楽曲の全体を見据えながら、緻密に全曲を組み上げていくこのコンビの演奏は、ひたすら美しい。管楽器のほんのひとフレーズを聴いても、これほどまでに作品に愛情を注いで演奏されている録音は決して多くない。ドイツの音楽性の美しさがここにある。

カラヤン指揮/ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

【ユニバーサルミュージック：DVD UCBG1032/9002 (4枚組)】

カラヤンとベルリン・フィルは、映像で2種類、録音で3種類のベートーヴェンの交響曲全集を作っている。1972年に収録されたこの映像は61～62年と75～77年の2回の全集録音の中間で制作されたもので、映像演出にカラヤン独自の趣味が色濃く反映されている点で好き嫌いを分けるが、演奏はすこぶる充実している。ベートーヴェンの音楽のもつ推進力と覇気、そして雄大なスケール、さらには、そこから生まれる啓蒙主義的とも呼べるような理想主義の賛歌を、カラヤンとベルリン・フィルという20世紀を代表する名コンビは高らかに歌い上げている。

アバド指揮/ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

【TDK DVD：TDBA0042】

カラヤンの後を受けてベルリン・フィルの音楽監督となったアバドは“専制君主的指揮者カラヤン”と路線を異にし、オーケストラに自由とより一層の自然性を導入した。これは、カラヤン時代よりも尚いっそう高い演奏技術をもつ楽員の参入と、オーケストラ演奏におけるアーティキュレーションの進化がその背景となっている。癌治療を経た後のアバドの姿は痛々しいが、カラヤン時代とは一味違うしなやかで、よりいっそう色彩的なベルリン・フィルの演奏は爽やかだ。最新映像なだけに、マルチ・アングル対応の映像処理も鑑賞には楽しいだろう。

ゲールド (ピアノ)

【ソニー・ミュージック・エンタテインメント SC-SRCR8928】

名演快演ひめく『運命』のディスクの中から、あえて6組目には、リストがピアノ用に編曲した1枚を選ばせていただいた。19世紀においては、もちろんレコードは存在せず、実際のコンサートに行くか、家庭で自らが演奏してさまざまな名曲を楽しむのが、音楽の鑑賞方法であった。ピアノの名手リストは、ベートーヴェンのすべての交響曲をピアノ用に編曲しているが、これらは、ベートーヴェンの音構造の骨格というものの確かさと面白さを、オーケストラとは一味違った明晰さで教えてくれる。ピアノ界の奇才ゲールドの演奏がそれを助勢する。